

日本近世における『智囊』の受容

——文学的側面と教学的側面——

リュウ エイ
劉 穎

一. はじめに

笑話集『笑府』や白話小説集『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』の所謂「三言」を著わし、江戸文芸に多大な影響を与えた中国明朝末期の文人馮夢龍（1574～1646）には『智囊』という28巻からなる大作がある。『智囊』には中国古代から明代までの様々な人物の智恵にまつわる逸話計800余りが収録されている（増補版『智囊補』には1000話余り）。馮夢龍はそれらの人物の智恵を品評し、逸話を「上智」、「明智」、「察智」、「胆智」、「術智」、「捷智」、「語智」、「兵智」、「閨智」、「雜智」の10の部に分類している（表1）。

『智囊』は明天啓6年（1626）に刊行されると、世間からかなりの好評を受け、8年後の崇禎7年（1634）に同じく馮夢龍による増補版の『智囊補』が刊行されている。『智囊補』が世に広く流布し、『智囊全集』、『増定智囊補』、『新增智囊補』などといった多くの種類の版本が刊行された。一方、原版の『智囊』は稀覯書となり、現在容易に見ることができない^①。『智囊』と『智囊補』は、出版の時期は勿論、話の数、細部の構成も異なっており、厳密に言えば同一の作品ではないが、本発表では統一して『智囊』という書名を使用する。

日本近世文学における『智囊』の受容については、辻原元甫による抄訳本、仮名草子『智恵鑑』（万治3年刊）を巡って、中村幸彦・木村三四吾両氏の翻刻・「解題」^②をはじめ、中村幸彦氏の概説^③、目加田さくを氏の「智恵鑑の典拠論1——智囊との関聯よりみたる」^④、花田富二夫氏の「近世前期小説に於ける中国文学影響の一断面——智恵鑑周辺」^⑤など、すでに指摘されて久しい。従

表 1

部	卷数	卷名	部	卷数	卷名
上智部	卷一	見大	捷智部	卷十六	靈変
	卷二	遠犹		卷十七	応卒
	卷三	通簡		卷十八	敏悟
	卷四	迎刃	語智部	卷十九	辨才
明智部	卷五	知微		卷二十	善言
	卷六	億中	兵智部	卷二十一	不戦
	卷七	剖疑		卷二十二	制勝
	卷八	経務		卷二十三	詭道
察智部	卷九	得情		卷二十四	武案
	卷十	詰奸	閨智部	卷二十五	賢哲
胆智部	卷十一	威克		卷二十六	雄略
	卷十二	識断	雑智部	卷二十七	狡黠
術智部	卷十三	委蛇		卷二十八	小慧
	卷十四	謬数			
	卷十五	権奇			

来の近世文学研究で結論付けられた『智囊』の影響というのは、仮名草子『智恵鑑』の成立をもたらし、そして『智恵鑑』を通して、井原西鶴、江島其磧などの浮世草子作者に作品の素材を提供したことである。池澤一郎氏による上田秋成と『智囊』との関連^⑥、福田安典氏による平賀源内と『智囊』との関連のようなご指摘^⑦もあるが、『智恵鑑』以外の『智囊』の文学的受容については殆ど研究の俎上に挙げられてこなかった。筆者は近年この課題を中心に研究し、若干の新知見得たので、本発表ではまずその研究結果^⑧について報告し、さらに『智囊』の教学的側面に視点を据え、近世日本の教育と学問界における『智囊』の受容の有様について考察していきたい。

二.『智囊』と日本近世文学

日本大学付属総合学術情報センターに、近世後期の戯作者滝沢馬琴が国文学者である友人の殿村篠斎に宛てた書簡の一部が保存されている。それらの書簡のうち、天保11年12月14日付のものに次のような記述が見える。^⑨

摸稜案にあらはし候、善吉おろくの事は、當時上方にても去筋之讀本出候。是は小説に出候事を翻案致候哉と御尋之趣、承知仕候。此儀は江戸著聞集之たぐひ成そく書に、お六櫛の事を聊書候物有之。お六と言才女、^{ママ}施人之賊難おすくひ候事有之。夫ヲ聊取入候迄にて、其外は作者の腹よりうみ出し候趣向に御座候。又同處に題目出し候趣向は、年久敷事にて忘れ候へとも、六卷にかゝんと思ひ候を、板元の好にて五冊に致候故、題目の見出し置候也。都而かの書は、智囊全書、棠陰秘又、^{ママ}宋之包拯か讞獄之事を書つめ候小刻之小説物壺口有之、夫等ヲ少し宛取合候得共、三十年以前之事故、書名は忘れ候て、唯今急に思出しかね候。此書に不限、三十余年以前之自作の著述は、只今讀せ聞候得は、世おへだて候人の作書お見候心地にて、壺つも不覚事多く御座候。八十近く成候老人之わすれがち成事、追ゝは老境に入せ給はゝ、思召當るへく奉存候。(傍線および句読点は私に施した)

この部分の記述は馬琴が自身の読本小説『青砥藤網摸稜案』（前編文化8年刊、後編文化9年刊、各5巻5冊）の創作と出版について述べたもので、傍線部に「^{すべて}都而かの書は、『智囊全書』」云々とあるが、『智囊全書』は即ち『智囊』の増補版の一種『智囊全集』の誤りである。要するに、『青砥藤網摸稜案』の創作に際して、馬琴は『智囊』を利用していたのである。馬琴の随筆『玄同放言』（文政元年～文政3年刊）の「引書目録」にも『智囊全集』の書名が上がっているので、馬琴が『智囊全集』を読んでいたことはほぼ間違いないであろう。

実際、『青砥藤網摸稜案』の典拠の再検討をおこなったところ、作品中複数

の趣向が『智囊』の話に拠るものと立証できた（例えば、『青砥藤網摸稜案前集』巻一・二「縣井の段」と『智囊』巻十「向敏中」、『青砥藤網摸稜案前集』巻四「藤網六波羅に三たび獄を折る事」の「加古飛丸相続争いの件」と『智囊』巻九「奉使者」、『青砥藤網摸稜案後集』の密夫詮議の趣向と『智囊』巻十「呉復」など）。さらに、趣向の摂取だけでなく、『青砥藤網摸稜案後集』の構成においても『智囊』と深く関連していることが分かったが、詳細は別稿に譲りたい。前掲馬琴書簡の傍線部、『智囊』に続いて『棠陰比事』と中国宋朝の名臣包拯の小説『龍図公案』と思われる記述がある。『智囊』の「察智」の部に所謂公案——裁判話が多数収められている。それらの話は『棠陰比事』と『龍図公案』の中の話と類似しているものが少なくない。しかし、この事実は従来の研究においてよく見落とされ、『青砥藤網摸稜案』を含め、日本近世の裁判小説の典拠本として『棠陰比事』と『龍図公案』が挙げられることが多かった。『智囊』と「三言」も同様の類話問題が存在している。同じく馮夢龍の作品であるにも係わらず、「三言」が大きく取り上げられているのに対し、『智囊』が言及されることは稀であった。両者の関連性を視野に入れ、『智囊』の文学的意義を再認識する必要があるように思われる。

また、所謂和製類書にも『智囊』の受容の一端を見ることができる。和製類書は日本近世の啓蒙教育の百科事典として、庶民の教育に使われたことが多いが、その利便性の良さから、近世戯作者たちにも愛用されていた。江戸前期に刊行された類書『愈愚随筆』と『訓蒙故事用言』には『智囊』からの引用がある（表2）。江戸前期の『智囊』の受容と言えば、往々にして『智恵鑑』が取り上げられることが多いが、和製類書における『智囊』の受容も大きな意味を持つのではないかと私は考えている。

国会図書館に江戸中後期の儒学者中井履軒の写本『智囊聞書』が所蔵されている。漢字カタカナ交じり文で記されており、後述する和刻本『智囊』（猪飼校略本）の注釈書である。江戸後期の儒学者津阪東陽が編纂した『聴訟彙案』のうち、五分の一の話は『智囊』から援引したものである。明治18年（1885）、

表 2

『智囊』	『愈愚随筆』	『訓蒙故事要言』
察智部卷九 得情「奉使者」	卷二の八十五「張一非」	卷四「張良讓財」
閨智部卷二十六 雄略「新婦処盗」		卷六「盗骸送家」
閨智部卷二十六 雄略「鄒僕妻」		卷六「夫敵妻報」
察智部卷九 得情「楊評事」		卷九「趙三官逢害」

近江水口藩の藩儒だった中村栗園の遺作『日本智囊』が刊行されている。その書名の通り、『日本智囊』は中村栗園が馮夢龍の『智囊』を倣って書いた作品である。津坂東陽も中村栗園も藩校の教育に精力を注いでいた人物であるが、彼らのような江戸の儒学者たちが『智囊』に高い関心を寄せていた理由はなにか。その理由は『智囊』の逸話の内容にあるというよりも、著者馮夢龍の思想にあるように思われるが、詳細については後述に譲りたい。

三. 『智囊』の舶載記録と和刻本『智囊』

『智囊』の抄訳本『智恵鑑』の成立は万治3年(1660)であるので、『智囊』はそれより以前に日本へ舶載されたことが分かる。享保5年(1720)に將軍吉宗が鎖国令を緩和したこともあり、当時長崎に入港した唐船によって舶載された漢籍の数は増加傾向にあった。『智囊』も当時馮夢龍の人気著書として日本に渡ったのであろう。大庭脩氏の『江戸時代における唐船持度書の研究』^⑩に収められている中国輸入漢籍の記録には『智囊』の書名をいくつか確認することができる。

○『商舶載来書目』(文化元年)

智囊補 一部二套(享保16年)

智囊 一部一套(宝暦10年)

○『落札帳』(弘化2年)

智囊補 三部 一包六本

廿六匁 鉄や

廿二匁 安田や

十八匁五分 永見や

○『書籍元帳』

智囊補 三部各二套 貳拾三匁 貳拾六匁 鋳屋右一郎（弘化元年）

智囊補 小本 五部各二包 六拾目拾貳匁（弘化3、4年）

智囊補 一部一包 拾貳匁（嘉永2年）

また、同書所収の宝暦4年の『宝暦四年舶来書籍大意書戌番外船』に『智囊』の増補版——『智囊補』の「大意」が書かれている。

智囊補 貳部各二套十二本 但每部脱紙二張 内壹部ハ二卷欠缺

右ハ明ノ馮猶龍カ編輯ニテ古今ノ君臣処士女流ノ智ヲ論定品隲スル諸家ノ説ヲ採テ上智明智察智胆智術智捷智語智兵智閨智雜智ノ十門ヲ分チ類從シテ評語ヲ附シ毎門ノ首メニ総叙ヲ載セタル原本ヲ人ノ需メニ由テ是ヲ増補シ二十八卷ト仕リ候フ書ニテ御座候

これらの持渡書の中でもっとも時代が古い『智囊』の記録は『商舶載来書目』に見える享保16年（1732）のものである。計六ヶ所確認できる『智囊』のバージョンのうち、原本『智囊』は一種類だけであり、その他はすべて増補版の『智囊補』であることに着目したい。先述したように、当時の中国においては原版の『智囊』に代わって増補版の『智囊補』が定着し、流布するようになったこともあり、日本に舶載された『智囊』も増補版が多数を占めていたようである。『宝暦四年舶来書籍大意書戌番外船』に『智囊』ではなく、『智囊補』の「大意」が記されていることも、同様なことが伺える。

漢籍の輸入が盛んだったとはいえ、日本での需要に追い付かないのは容易に

想像できる。舶載の漢籍は高価だったこともあり、一般読者の需要を充たすために和刻本の刊行が行われていた。近世中期から『三言』や『笑府』などの著書の流行により名前を知られた馮夢龍の大作とはいえ、『智囊』の和刻本の刊行は早期に実現されなかった。その理由の一つは『智囊』が長編の作品であることにある。この点について、和刻本『智囊』の編者猪飼敬所も「巻帙浩瀚、不易上梓」^⑪と嘆いたのである。もう一つの理由は馮夢龍の文彩にあると考えられる。『智囊』各巻頭の四言韻文で綴られた「引語」は美文だが、やや難解でもある。いずれにせよ、ようやく文政4年（1821）になると、当時一流の儒学者猪飼敬所による『智囊』の施訓本が京都の大谷津逮堂より刊行された。全ての話が収録されていないものの、およそ三分の一の分量の逸話が選出された。この和刻本『智囊』は広く流布し、明治頃に後印本も刊行され、読者の人気を博していた。

猪飼校略本以外に、幕府昌平坂学問所からも『智囊』が刊行された。明刊本『智囊』を底本として、28巻すべてを収録しており、14冊の長さに及ぶ。この官版『智囊』は無刊記だが、天保15年（1844）に成立した『官版書籍解題略』に書名が載せられていないため、刊行の時期は天保15年以降と推定される。なお、『官板書目』（伊達邦宗編 大正年間編者自筆本）には「官版書籍解題略全二冊不載ノ分」として、『智囊』ほか九部の書は「内務省ニ板木現存スルモノ」として書名が収録されている。^⑫明治期では吉見藩から藩版の『智囊』も刊行されたが、「上智部」2巻しか収録されていない。また、明治26年と明治27年に、広島藩の藩儒だった山田養吉（1822～1901）による個人出版の『智囊』も刊行されていた。吉見藩の藩版『智囊』同様、「上智部」のみを収録するものであった。山田養吉と言えば、明治14年（1881）に浅野家の私立学校「修道学校」の校長を務め、5年後の明治19年（1886）に「修道学校」の経営を浅野家より受け継いだ人物で、広島の近代教育に貢献した教育家である。

四. 官版『智囊』刊行の背景

官版『智囊』と藩版『智囊』の刊行は、幕府官立の学問所と藩校において『智囊』が教科書、或いは参考書として用いられていたことを意味している。朱子学を正学とした幕府の学問所はなぜ、当時俗文学の作者として知られていた馮夢龍の著書を刊行したのか、大変興味深いことである。その理由について、増井経夫氏は次のように分析されている^⑬。

これを学問所が全書翻刻にふみきったのは、ただ京都の儒者への対抗からだけではなかったようである。官版も幕末には朱子派一辺倒ではなく、民政に関するものがみられるようになったことと並行し、政治的緊張とは別にある種の緩和が現れた証拠であり、江戸期の文化傾向の方向でもあった。説話集から歴史的教訓を学ばせようという方針に学問所が共鳴し、出版しようという意欲は、江戸に動脈硬化しない余力が残っていた証拠である。

「京都の儒者への対抗」とは先に和刻本『智囊』の刊行を実現させた京都出身の猪飼のことを指すのだが、増井氏は官版『智囊』刊行の主な理由として、説話集『智囊』から「歴史的教訓を学ばせようという方針に学問所が共鳴した」ことを挙げている。確かに、話の内容からみると、『智囊』は「歴史的教訓」を説く「説話集」であるが、しかし、馮夢龍の評語に着目すると、また違う見方ができるのである。

『智囊』における馮夢龍の評語には、智恵の品位、智恵の応用、智恵と道徳・知識の関係などが語られているほか、儒教や政治批判を含めた言論も所々見受けられる。清朝の『四庫全書総目』の『智囊』の項においてそれらの評語は「佻薄殊甚」と批判されたのもその理由からである。つまり、一般的認識として『智囊』は馮夢龍が編纂した逸話集に過ぎないが、実際はそれだけではない。『智囊』における馮夢龍の評語の分量は膨大であり、評語の紙幅が逸話の紙幅を遥かに超えた個所も少なくない。台湾の学者胡萬川氏の言葉を借りれば、

『智囊』は「馮氏個人の政治社会評論集」である。^⑭ 山口建治氏も「『智囊』の逸話とその評語は、諧謔に富む鋭い社会批評になっている」と指摘されている。^⑮

ひとまず、『智囊』の評語に見る馮夢龍の人生観と政治思想について考えていきたい。馮夢龍の思想を語るには、彼と同時代の二人の人物に言及せねばならない。一人は王陽明（1472～1528）、もう一人は李卓吾（1527～1602）である。「心即理」、「致良知」、「知行合一」を提唱した王守仁こと王陽明は中国明朝屈指の大思想家である。実践を重んじ、朱子学を批判的に継承する彼の思想は「王学」と呼ばれ、明朝中期以降の中国思想界と文学界に大きな影響を及ぼした。馮夢龍もその王陽明の思想に傾倒した一人であった。馮夢龍は晩年、王陽明の伝記小説『皇明大儒王陽明先生出身靖乱録』を書いている（馮氏著書『三教偶拈』に収録されている）。この伝記小説は「三言」同様、中国国内では散逸しており、日本にだけ原本が残っていたものである。『三教偶拈』の序文の中で、馮夢龍は「国朝道学公論必以陽明先生為第一」^⑯と述べ、要するに「明王朝では道学について論ずる場合、必ず陽明先生を第一とする」と王陽明を崇めている。『智囊』には王陽明の逸話の数が最も多く、計11条も収録されており、その詳細は次の通りである。^⑰

上智部卷二・遠猶「王守仁」、上智部卷三・通簡「王陽明」、上智部卷四・迎刃「王守仁」、察智部卷十・詰姦「王陽明」、術智部卷十三・委蛇「王守仁」、術智部卷十四・謬数「王守仁」、捷智部卷十六・靈変「王守仁」、語智部卷十九・辨才「王守仁」、兵智部卷二十二・制勝「王陽明」、兵智部卷二十三・詭道「厨人濮等」、雜智部卷二十八・小慧「術制継母」

一つの著書の中で、同一人物の逸話をこれほど多く取り上げていることから見ても、馮夢龍は王陽明の崇拜者であったことが覗えよう。無論、上記の王陽明の逸話に附された馮夢龍の評語からも馮夢龍の王陽明への尊敬の意が随所見受けられる。

次に馮夢龍と李卓吾との関係について見ていきたい。李贄こと李卓吾は王陽明の思想に共鳴しながらも、独自に「童心説」——つまり偽りのない真心こそが最も大切なものであることを唱えた。その過激な思想が異端視される一方、多くの追随者をも生んだ。馮夢龍もその信者の一人であった。明人許自昌の『樗斎漫録』によれば、馮夢龍は「酷嗜李之学、奉為蓍蔡」（李卓吾の学を好み、崇めていた）という。馮夢龍は李卓吾が批点した『水滸伝』——『李卓吾先生批点忠義水滸伝』の増補、整理、及び出版に携わっていたことも知られている^⑮。

馮夢龍は『智囊』の中で李卓吾の言論を引用し（明智部卷五・知微「曹瑋」、兵智部卷二十三・詭道「孫臏 虞詡」）、肯定的な評価を与えている。『智囊』評語に反映されている馮夢龍の思想は李卓吾の思想と極めて類似しているものも少なくない。例えば、卷一・見大「範文正」に見える「天下無廢人」（世の中には何の役にも立たない人がいない）という記述は、まさに李卓吾の『李氏焚書』の「夫天生一人、自有一人之用」（だいたい天が一人を生むには必ずから一人の用がある）の説を受け継ぐものと言えよう。また『智囊』において、馮夢龍は「聞智」の部を設け、古今の才女の逸話を収録している。「聞智部」の評語からは彼の男女平等論を明確に読み取ることができる。男女平等論と言えば、李卓吾の思想の中で最も重要な主張の一つである。

ちなみに、増井氏は馮夢龍を「陽明学者」とし、「李卓吾の再来」と評している^⑯。馮夢龍を陽明学者と断定するには根拠不十分に思われるが、少なくとも李卓吾の思想が馮夢龍に大きな影響を与えたことは紛れもない事実と言えよう。

これまでの考察を通して、『智囊』の中には確実に王陽明と李卓吾的要素が多く含まれていることが確認できた。この事実関係は一定の陽明学的知識を有する読者にとっては、容易に看破できるのではないかと思う。

王陽明の思想は17世紀初頭に日本に伝わり、以来多くの信奉者を博した。日本近世の代表的な陽明学者として、初期の中江藤樹、熊沢蕃山、中期の石田梅岩、後期の佐藤一斎、大塩中斎などが挙げられる。一方、日本近世における李卓吾の影響と言えば、安政の大獄で処刑された長州藩士の吉田松陰（1830

～1859) が獄中において李卓吾の著書『焚書』を愛読していた話が有名だが、日本近世における李卓吾の影響はほかにも多く指摘されている²⁰⁾

さて、幕府の学問所はどういう理由で、このような陽明学の思想と密接に関係している『智囊』を刊行したのか、再び疑問がわいてくる。寛政異学の禁以降、昌平坂学問所では朱子学以外の異学を教授することが禁止されていたはずである。『智囊』官版発行の背景には、幕府の学問所がある程度陽明学を容認していたことが指摘できる。または、陽明学を重んじる人物たちの勢力が強くなったことが推測できる。そこで注目したいのは佐藤一斎(1772～1859)という人物である。天保12年(1841)、昌平坂学問所の儒臣に任命された佐藤一斎は「陽朱陰王」と呼ばれるほどの陽明学者であった。或は、『智囊』官版発行の背景には、佐藤一斎またはその他の陽明学に近い学問所の実力者の働きがあったかもしれない。

五. おわりに

このように、日本近世における『智囊』の受容史を考える場合、和製類書や浮世草子、読本などに素材と趣向を提供する文学的側面と、儒学者に知識と思想を教授する教学的側面を併せて認識しなければならないといえよう。『智囊』の読者のうち、戯作者馬琴のように『智囊』の文学性に興味を示した人もいれば、『智囊』の思想性、つまり馮夢龍という中国明末の文人の哲学に興味を示した人も少なからずいたであろう。その思想性は二重の意味に解釈することができる。一つは『智囊』という作品における「益智」という実用的思想性である。もう一つは作者馮夢龍という人間の人生の見解、愛憎の感情、政治態度の思想性である。

この度の発表に際して、日本近世の思想史、特に近世の儒学思想史の研究書を多く拝見した。日本の「儒教」研究において、同時代の移入漢籍への目配りを欠けていることや、同時代の中国明清学術界の動向とその移入問題を視覚外に置いてきたことが問題視されている。近世文学研究も同じ問題が存在してい

るように見受けられる。作品成立の背景、作者の思想観念、読者層の分析、文学と儒学との関連など、多視点から一つの作品を追求していくことで、その全体像がより鮮明に映しされてくることに気づいた。今後の課題として、近世の随筆、日記、書簡などの文献を調査し、『智囊』と江戸の知識人との関連をさらに考察していきたいと考えている。

[注]

- ①『智囊』諸版本について、拙稿「『智囊』流布管見——書誌の事項を中心に」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第9号 平成16年3月刊）をご参照願いたい。
- ②『近世文学未刊本叢書 仮名草子篇 一』（養徳社 昭和22年10月刊）。
- ③『仮名草子の説話性』（『中村幸彦著述集 第五巻』中央公論社 昭和57年8月刊）。
- ④『文芸と思想』第9号 福岡女子大学文学部紀要 昭和29年7月刊。
- ⑤『国語国文学研究』11号 熊本大学法学部国語国文学会 昭和51年3月刊。なお、花田氏の著書『仮名草子研究——説話とその周辺』（新典社 平成15年9月刊）第一部第二章にも『智恵鑑』と『智囊』に関する記述がある。
- ⑥『『智囊』の一節をめぐって』（『近世文芸研究と評論』第37号 平成元年11月刊）。
- ⑦『明清小説と、日本近世小説と——庭鐘・源内の時代』（『江戸文学』第38号 ぺりかん社 平成20年6月刊）。
- ⑧『智囊』に関する拙稿は前掲注①の拙稿のほか、『龍図公案』三話——馬琴『青砥藤網摸稜案』再検討の前提として——（『鯉城往来』第5号 広島近世文学研究会 平成14年12月刊）、『中国「僧人冤罪話」三話——馬琴『青砥藤網摸稜案』再検討の前提として——』（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第8集第8号 平成15年3月刊）、『棠陰比事』と『智囊補』——馬琴『青砥藤網摸稜案』典拠の再検討——（『鯉城往来』第8号 広島近世文学研究会 平成17年12月刊）、『摸稜案前集』巻四について——相続争いにおける“遺言状の謎”を中心に——（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第11集第11号 平成18年3月刊）、『津阪東陽著『聴訟彙案』について——『智囊』受容史の一コマ——』（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第12集第12号 平成19年3月刊）をご参照願いたい。
- ⑨本書簡は『京大本馬琴書簡集 篠斎宛』（木村三四吾編校 八木書店 昭和58年12月刊）、『日本大学総合図書館蔵 馬琴書翰集』（大澤美夫、柴田光彦、高木元編校 八木書店 平成4年11月刊）、『馬琴書翰集成 第5巻』（柴田美彦、神田正行編 八木書店 平成15年9月刊）にそれぞれ収録されている。本発表における馬琴書簡の引用は現物をもとによる筆者の翻字である。
- ⑩関西大学東西学術研究所 昭和42年刊。
- ⑪猪飼敬所校略和刻版『智囊』の跋文による。
- ⑫『日本書目大成第四巻』汲古書院 昭和54年刊。
- ⑬『「智囊」中国人の智恵』（朝日選書105 朝日新聞社 昭和53年3月刊）第三章による。
- ⑭『從智囊、智囊補看馮夢龍』（『中国古典小説研究専集1』 聯経出版事業公司 昭和54年8月刊）。
- ⑮『馮夢龍『智囊』と開讀の變』（『東方學』第75輯 昭和63年11月刊）。
- ⑯『三教偶拈』（馮夢龍全集・魏同賢主編30 上海古籍出版社 平成5年6月刊）。
- ⑰テキストは京都大学人文科学研究所附属漢字情報センター蔵明版『智囊全集』紙焼本を使用した。
- ⑱大木康氏『明末のはぐれ知識人——馮夢龍と蘇州文化』（講談社 平成7年4月刊）第四章参照。

①⑨注⑬の書、第二章による。

②⑩劉岸偉氏『明末の文人李卓吾——中国にとって思想とは何か』（中央公論社 中公新書 1200 平成 6 年 8 月刊）と中野三敏氏「江戸の中の李卓吾」（『大学出版』第 39 号 平成 10 年 10 刊）に詳しい。

* 討議要旨

中嶋隆氏から、①中国の書物に関して、前期と後期では享受の仕方が異なると考えられるが、『智囊』そのものの性質や、その作者の思想性に対して興味を持たれるようになったのはいつごろからと考えられるか、②近世前期の仏書受容はどのように考えるべきかという質問があった。発表者は、①辻原元甫の「知恵鑑」（万治三年刊）は、意図的に話を選択して享受しているように思われるが、あるいは思想的な意図を読み取ることができるかもしれない、②かなり広範囲に享受していると思われるので、今後検討としてくと答えた。田中康二氏は、書名の読み方について教示した上で、「聞書」の存在は懷徳堂で『智囊』の講義が行われていた証左である旨を指摘し、さらに、これまでの研究を統合していこうとする発表者の方向性に理解を示しつつ、研究の視点として、文学・思想・教育等の区別をせず行っていくとより良いのではないかと助言した。